

国際友和会・日本友和会の歴史

(政池仁「日本友和会とはなにか」(2003年「日本友和会の歩み」誌)より抜粋)

〔FORの起こり〕

アメリカにチャーチピースーユニオンという団体があった。これはアンドリュー・カーネギーの多大の寄付金のもとになってできたもので、リンチF. Lynchという人が書記長であった。「九 - 四年、このユニオンが国際的教会会議を開こうとして、スイスのコンスタンツに教役者たち一五〇人を集めた。しかしこの会議が始まったのは八月五日で、すでに第一次大戦の火ぶたは切られていた。すなわち七月二十八日にオーストリアとセルビアが、八月三日にドイツとフランスが、八月四日に英国とドイツが開戦していた。そして五日にはロシアも参戦した。そこでこの会議では、交戦各国の首脳たちに戦争をやめることを訴える電報を打ったのち解散せざるを得なかった。しかし、これが諸教会を通しての国際親善同盟を推進するものの第一歩であった。この会は第二次大戦後の一九四八年にできた世界教会会議に吸収された。また、この会はFORの前身ということもできる。

この会議が終って、会員たちが去ってのち英国のフレンドの会員ヘンリー・ホジキンHenry Hodgkinと、ドイツの牧師ジークムンドーシュルツエF. W. Siegmund-Schulzの二人は、祖国のクリスチャンたちに、敵を殺せとすすめることはできない、お互いに軍務を拒否しよう、そして戦争に反対しようと言ひ、一緒にドイツのケルンまで行って握手して別れた。

ジークムンドーシュルツエはドイツで戦争反対の声明書を出したが、すぐ逮捕され、軍法会議にかけられ、死刑宣告一步手前というところまで行ったが、彼はカイゼルの宮廷牧師であったため、判決延期、ついで釈放となった。第二次大戦の時にも戦争に反対してヒトラーに逮捕されたが、うまく逃げ出してスイスに行くことができ、今日までドイツFORの指導者として働いている。

一方、英国のホジキンは帰国後すぐ「好意を持った男子および女子へのメッセージ」というものを四万五千部刷って配った。また八月八日にはその文章を、九大新聞の広告欄に金を払ってのせた。しかし英国では言論の自由が重んじられていたから、彼は逮捕されないですんだ。六週間のちに開かれたフレンドの会議では、ドイツには平和を求めたらどうかとか、ヨーロッパ連邦を作るよう努めたり、ドイツの神学者ハルナック、オイケンなどをもふくめた「広範囲の教会」を作ったらどうか、と発言する者もいた。

フレンド以外にもホジキンに共鳴した者たちがいた。そのなかでも長老教会の牧師リチャード・ロバートスRichard Robertsは最も熱心に彼を支持した。そしてその年の十二月二十八日から三十一日までの四日間、一三〇人の男女がケンブリッジ大学に集まり、熱心に祈りかつ討議して、一つの綱領を作った。そしてその会の名をFellowship of Reconciliationと名づけた。「リコンシリエーション」という名にしたのは、一つには、前からあった「ロンドンピースーソサイエティ」が、戦争もやむを得ない、と発表していたから、これとまぎらわしくない名にするためであった。しかしそれ以上に、ただ戦争に反対するだけでなく、人々を和解させるのが目的であ

る、という理由からであった。

「神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務めをわたしたちに授けて下さった。すなわち神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである」から、我々もキリストのなされたことをまねて、和解の労をとるべきである、と

いうのである。(第二コリント五・十八、十九)。そこで次のような五つの原則が作られた。

1. イエス・キリストの生涯と死において現わされたような愛というものは我々の今まで見たこと以上のものをふくみ、愛のみが悪に打勝つ唯一の力であり、人間社会を保つ唯一の基盤である。
2. 愛の上に世界秩序をたてるには、この原理を信ずる人々が、彼ら自身にも、また他の者との関係においても、完全にこれを受けない世界を愛することにふくまれる危険を敢ておこなす必要がある。
3. だから、クリスチャンとして、戦争することは我々に禁じられている。そして我々の国に対する忠誠心、人類、普遍的教会(チャーチユニヴァーサル)、主イエス・キリストに対する忠誠心は、戦争の代わりに「愛」を、個人生活においても、社会生活においても、商業生活においても、国民生活においても「王座」に座らせるために終生奉仕することを命ずる。
4. 神の力と知恵と愛というものは、我々が今日経験している限界をはるかに越えているものであり、神はそれを人間生活の中に新しい、そしてもっと大きな方法で現わそうと常に待っておられる。
5. 神はご自身を、人間を通して現わされるのであるから、我々は自身を神のあがないの目的のために提供し、彼が示されるどんな方法でも彼のお役にたつようにすべきである。

この会合には、ほとんどすべてのプロテスタントの教派のほか、ローマカトリック教会の信者も加わった。彼らの欲したのは共通のクリード(信条)ではなく、いきいきとした精神であった。こうしてFORが成立したわけであるが、第一回の理事長(チェアマン)には、当時三十七才のホジキンがなり、書記長(セクレタリー)にはルーシー・ガードナー(Lucy Gardner)という婦人がなった。しかし彼女は他に仕事を持っていたので数か月で退き、ヘンリー・ロバーツが書記長になった。

会が成立すると、これに加わる者がふえて、一九一五年十一月までには会員一五五〇名を数えるにいたった。なお、ホジキンは一九一五年秋アメリカに渡ってFORの宣伝をしたので十一月十一日にアメリカFORができた。理事長になったのはビーヴァー(Gilbert A. Beaver)、書記長になったのはエヴァンス(Edward W. Evans)であった。

兵役拒否の問題

戦争が始まって英国では最初は志願兵制度であった。しかし一九一六年には徴兵令が敷かれた。アメリカが参戦したのは一九一七年で、この国ではこの年に徴兵令が敷かれた。すると英国でも米国でも兵役拒否者がたくさん出た。彼らは「良心的兵役拒否者」Conscientious Objectors略してC・O・と言われた。フレンドやメノナ

イトの人々は殺されても戦争にいかぬという態度をとったので、英国ではすでに一八〇二年代に宗教的良心的拒否者の兵役を免除する法律ができていた。正式にそういう法律ができたのは第一次大戦の一九二八年である。

アメリカでも、独立戦争時代からC・O・があり、独立後憲法でそのようなことを定めた州もあった。アメリカが第一次大戦に参加した一九一七年には、選抜徴兵法S e l e c t i v e S e r v i c e A c tという法律ができて、C・O・たちは兵役を免じられ、その代りに非戦闘的業務、たとえば山林の保護、野生生物の保存、乳牛の品種検査、精神病院の世話などを命じられた。こういう人たちの働く所は民間公共奉仕所O v i l i a n P u b l i c S e r v i c e C a m p (C・P・Sキャンプ)と言われた。英国の国民兵役法B r i t i s h N a t i o n a l S e r v i c e A c tもこれにたものであった。

第一次大戦の時には、政府でC・O・と認めてくれなくて投獄された者は英国では16000名もいた。そのうち600人はFORの会員であったと、R e b e l P a s s i o nという本にある。ただしFORの会員はみなC・O・でなくてはならぬという規定はない。第一次大戦の時でも英米の他、ドイツ、フランス、オーストリアなどにもC・O・はいた。

日本では今は憲法第九条があつて戦争を放棄しているからC・O・に関する法律は必要ない。また憲法第十九条が「良心の自由はこれを侵してはならない」としているから、万一徴兵法ができて強制的に自衛隊に入れられることはあり得ない。新憲法によって我々がこのように基本的人権を保護されるようになったのは、長い歴史の間にヨーロッパ人、とくに英米人が自由のために斗ってくれたからであつて、我々は彼らの功績に感謝すべきである。無教会の中には内村鑑三先生がC・O・の立場をとられなかったから、C・O・の思想は浅薄なのだと言う人があるが、いつまでも内村先生の思想の中にのみとじこもっているのは無教会的でない。内村先生は流動的、進歩的な人でその一生の内には思想がひどく変っているのである。先生なきあとの我々は、先生の思想をさらに前むきに進歩せさねばならぬ。

IFORの成立

第一次大戦が一九一八年に終ると、翌一九一九年十月、オランダのビルトーヴェンB i l t h o v e nに10か国の平和主義の男女50人が集まった。四か年間会うことのできなかった英国のホジキンとドイツのジーグムンド・シュルツェとがかたい握手をして神に感謝したのはもちろんである。リリアン・スチブソンという女性はその会合のことを書いて「我々はストレインジャー(他国人)として集ったが、フェロシップとして別れた」としている。F e l l o w s h i pのFを特に大きく書いてあるからみなFORの会員になったというのであろう。これが国際友和会(IFOR)の起りである。ただしインターナショナル・フェロシップ・オーバー・リ・コンシリエーション(IFOR)の名ができたのは数年のちのことであり、その本部は英国にあつたり、米国にあつたり、オーストリアにあつたりしている・今日では世界の27ヶ国にFORがある。韓国にもできつつある。

FORの創始者ホジキンは天職を終えて一九三三年に五十五才で天に帰った。ロバーツは一九四五年に七十一才でなくなった。ジグムンド・シュルツェは第一次大戦中は二十七回も逮捕されたが、今日まだ八十二才の高令で健在である。八〇才の誕生日には日本友和会からもお祝を送った。

敗戦国の小児たちを救う

第一次大戦の終わったあとのフランスのドイツに対する敵がい心は実にひどく、一九一九年にベルサイユ条約ができた時に報復条項というものがフランスの主張で入れられた。アメリカ大統領ウィルソンは報復には反対、英国のロイド・ジョージもウィルソンに賛成だったが彼の閣僚中には報復を主張する者が多くいて、ついにフランスのクレマンソーの主張が通り、支払いの見込みのないような巨額な賠償をドイツに科すことになった。そして英国の海軍はドイツの諸港湾を封鎖して食糧がドイツに、はいらぬようにした。そのため中欧の人々で餓死した者は百万に達した。ある産院で一か月に生れた百名の赤んぼうのうち、満一才に達した者は僅か二名だけ、という例もあった。IFORはこの非人道的行為に憤慨し、英、米、オランダ、カナダその他にある類似平和団体や教会に呼びかけ、中欧の幼児、小児たちを救う運動に熱中した。パンフレットを出し、代議士を訪問し、街頭演説をやり、新聞の主筆を説き伏せたりした。イースト・エンドの貧民街の婦人たち二十名はFORのレスター女史のいるキングスレー・ホールから、喪服姿で下院まで一列の行列を作って静かにデモを行ば解かれた。

一九二〇年にIFORその他の請願があったので英国政府は、条件つきで、中欧の子供たちを英国につれてくることを許した。寄付金はたちまち集まった。この第一回として五五〇人の小児たちがウィーンから英国に移された。しかしそれほど栄養失調でない子供や、遠くまでの旅行にたえられそうもない子供たちは残された。その選抜調査のなされた建物は、八〇〇〇人の母親たちにとりかこまれた。連れて行かれた九才の子供たちは六才ぐらいの大きさであった。彼らの着ていた下着はサックであった。脂肪分を与えると最初は下痢した。ある子供が郷里の母への手紙に「英国では水はあまりありませんが、ミルクはほしいだけ、いつでも飲めます」と書いた。丈夫になった子供たちは喜んで国に帰った。ドイツにはIFORその他で集めた寄付金が送られ、ドイツ政府自身で救済事業がなされた。

一九二一年にはロシアが大飢饉におそわれた。ロシアはかつての連合国であったが、今はキリスト教を迫害し、国民から自由を奪ったため、英米の一般人からは新しい敵とみなされていた。フレンド教会ではこのいわゆる「敵」を愛するために多くのことをなした。FORのメンバーも多く個人としてこれに加わった。彼らはロシアの子供たちも、オーストリアやハンガリーの子供たちのように一年間英国に連れて来て救済することは人道上必要であるのみならず、両国の外交にもいい影響をおよぼすと考えて努力したが、それはついに英国政府のゆるす所とならなかった。ロシアのこの飢饉は急激な政体の変化のため、農民たちが働く意欲を失なったためである。これは実にすざまじいものであった。

和解の旅

第一次大戦後のフランスを中心とした連合国民とドイツを中心とした同盟国民との憎みあいは、まことにひどいものであった。それで IFOR では幾組もの「平和使節」を作って旅をさせた。一九二一年一月、英・米・独・オランダ人たちにフランス人も加えて作った一組がドイツに行った。米人ネヴィン・セーヤー Nevin Sayere もその中の一人であった。彼らの中のフランス人は宿屋に泊ることを拒絶された。ところが彼がユーモアを交えて自分の経験を語ったら、聴衆は感謝し、青年男女が彼の周囲に集まってきて、仲よしになった。そして宿が断った自分たちの国人の仕うちを攻めるにいたった。

その年の冬から一九二二年にかけて、ドイツ人をもふくめて六か国の IFOR の人々が、フランスのヴェルダンの近くの Esnes に行った。この地方は大激戦が八か月も続いた所で、フランス人のドイツに対する人気は最も悪かった。彼らを説得するには口をもってするよりも、行為をもってしなくてはならぬ。IFOR の人たちはフランス政府と契約して二、三の木造の家屋をたてた。その材料費は政府が出してくれたが、彼ら自身の生活費は自分で払い、以後その家の家賃から得られる利益を、その地方の公益のために使うことにした。三つ目の家ができつつあった時フランス政府は金がなくなったとってその契約を打切った。しかし彼らはそれにもひるまず、戦場のあとかたづけをした。すなわち散らばっている砲弾や兵器を集めたり、砲弾でできた大穴を埋めて畑や道路を作る準備をした。フランス人たちは、ドイツ人はみな鬼のような好戦的人物ばかりだと思っていたので、IFOR ではドイツ国内にも平和愛好者がいることを知らせるために、英国およびフランスのいくつかの新聞に交渉して、新聞記者を派遣して、ドイツ国内の平和主義者たちを訪問してそれを記事にするよう申出た。いくつかの新聞社では承諾したが、フランス政府はただ一人に限り、十日間のドイツ旅行を許した。一九二二年一月、ドイツの FOR の理事長ジークムント・シュルツェはこの記者を八つの都市に案内した。各都市の平和主義者たちは喜んで彼を迎え、ドルトムントでは八〇〇人の労働者が集まった。これらのことはフランスの新聞に出て、フランス人の心をやわらげた。

インドの独立運動と FOR

インドのマハトマ・ガンジーはヒンズー教徒で終始したが、ロシア人トルストイの影響を受け、新約聖書の山上の教えも読み、非暴力思想を持つにいたり、非暴力による独立運動を起した。そこで一九三一年英国政府は彼をロンドンに呼びよせて、いわゆる円卓会議（ラウンド・テーブル・コンファレンス）を開いた。英政府はロンドンのウェストエンドにある豪華なホテルを用意していたが、ガンジーはそこに泊ることを断わり、イーストエンドの貧民街にある FOR のミス・ミュリエル・レスター Muriel Lester のキングスレー・ホールに、一匹のヤギとともに泊って、そこから円卓会議に出かけた。ミス・レスターは貴族の娘で、伯父の一人はホーアという外務大臣であった。若いころ馬車で貧民街イーストエンドを歩いていた時、突然馬車の窓が開いた。何気なく外を見た彼女は初めて、世にはこんなひどい街があって、こんなみじめな生活をしている人々のあるとい

うことを知った。そこで彼女は父と妹ドリスの助けをかりて、ここにセトルメント（社会事業施設）を作った。キングスレーというのは彼女の死んだ兄弟の名でその記念のためにこの名をつけたのである。英国の社会福祉事業が今日世界一すぐれたものとなり、共産国よりも国民が幸福に暮らせるようになったのは、多くの人々の努力にもよるが、ミスーレスターに負うところも多い。彼女は三度拘禁の苦をなめた。「英国は、一九四五年に無血、無暴力革命を成就した。今や国内で一人の餓える者もなく、病人や身体障害者で、それぞれ必要な手あてを受けられない者は一人もいない」と彼女は言った。

彼女は平和のために七回も世界を一周し、日本には八回来た。戦前は WIL (w o m e n ' s I n t e r . L e a g u e F O R P e a c e a n d F r e e d o m) のため三回、戦後は F o R のため一九五〇年に二回、五四年、五八年である。彼女は実に敬けんな祈りの人で、祈りによって平和を来らせようとしている。私自身、彼女に会うたびに敬けんさにつり込まれる。彼女は平和運動家というよりは平和そのものといった感じのする人である。彼女が最後に日本に来た時は七十五才であった。本年五月野々宮初枝さんが英国に行った時は八十三才でかなり老衰していたとのことである。

ミスーオウエン (Gladys Owen) は本年七十三才ぐらいであるが四十年ぐらい前からインドに渡って、ガンジーの顧問となり、非暴力独立運動を助けた。ガンジーの弟子ネイルの娘バンディット夫人が十五才ばかりの長女とともに牢獄に入れられていた時、ミスーオウエンは英国政府とかけあって、その少女を獄から出して教育できるように外国に行かせた。ミスーオウエンは日本にも二度（一九五四年と一九五七年）来た。五十四年の時には北海道や信州（下伊那の山奥の農村）にも野々宮初枝さんと巡回してくれた。

第二次大戦の阻止運動

一九三三年一月、ヒトラーがドイツで政権を獲得してから、第二次大戦の起る心配がまして来た。F o R では何とかして戦争を阻止しようと努力した。その中でも一九二九～三一年の英国労働党内閣の閣僚だった友和会員ジョージ・ランズベリー G. L a n s b u r y の働きは大きい。彼はイーストエンドの貧民の子で 1859 年生まれ、12 人の子持ちで 1910 年に労働党の代議士になった。FOR の主唱で 1934 年に諸教派の平和主義者が一諸になって平和協議会（カウンスル・オブークリスチャンーパシフィスト）が作られ、その結果一九三五年にランズベリーが「ザ・タイムズ」に書簡を書き送ることになった。それには英国国教会のアーチビショップとローマ法王が各種の思想の教職たちをエルサレムに召集してゴルゴタの山から「神の休戦」を世界に呼びかけよ、というものであった。それから彼はルーズヴェルト大統領、フランス、ベルギー、デンマーク、ノールエイ、スエーデンの首相の所に行った。一九三七年にはヒトラーに会い平和会議を開くよう勧告した。ヒトラーはルーズヴェルトもしくは他の大国の首相が主催するならその会議に出てもいい、と言った。英国のチェンバレインは「成功するはっきりした見込みがあれば参加する」と言った。ランズベリーらはベルギーの首相をロンドンにまねいて、ゆきずまりになっている国際貿易の原因について討議しようと大集会を開いたが、英政府の消極的政策とドイツのオーストリア占領事件が起ったため失敗してしまった。ランズベリーはヒトラーに一年前

の会談を思い起してくれるよう電報を打った。またミュンヘン危機に際してはヒトラーおよびチェコの首相ベネスに電報を打った。さらにルーズヴェルトに、欧州諸国の政治家たちを招いて会議を開くようにと勧告した。ルーズヴェルトはそれに努力したが、英国のチェンバレインの反対でその会議は開かれなかった。

アメリカの友和会員ネヴィン・セーヤーもランズベリーと共にヨーロッパ諸国を歩きまわって平和のために努めた。彼は友和会のセントリーパウロと言われているほど世界中をたび回っている。日本にも来た。そのほか、A・J・マステ (A. J. M u s t e)、マルチン・ルーサー・キングは黒人であるがあるが、暴力を使わないで、アメリカ内の黒白人の差別撤廃に努力し、先年ノーヴェル平和賞を得たことを一言する。なお今日のアメリカ F O R は最も強力にベトナム戦に反対している。

教派別 C・O・の数

第二次大戦中の C・O・(良心的兵役拒否者) は英国人六万人、アメリカ人七万人ないし七万五〇〇〇人に達した。アメリカで C P S キャンプに入った者の数と教派別は以下の通り。

(一九三六年の信徒数に対する%)

メノナイト	四、六〇〇人	四・〇三
ブレズレン	一四六八人	〇・七八
フレンド	九〇二人	〇・九六
メソジスト	八四五人	〇・〇一
エホバの証人	五三二人	〇・七一
クリスタデルフィアン	一三六六人	四・九四
カトリック	一六二人	〇・〇〇一

上の数字は国会図書館の内田晋氏が一九五〇年の出版の書物「S e l e c t i v e S e r v i c e S y s t e m の「C o n s c i e n t i o u s O b j e c t i o n」記述を要約翻訳して「米国における良心的兵役拒否」として国会図書館から発行したもの。

右の数字を見ると、メノナイトの四、六〇〇人、四・〇三%は最大である。戦後メノナイト信者が急激にふえつつあるのは戦時中の忠実な闘いのためであろう。ただし信徒総数は戦時中でもメノナイト(一万四〇〇〇)の方がフレンド(九万三〇〇〇)より多かった。フレンドの方がC・O・の数も率も少ないのは意外であった。率で一番多いのはクリスタデルフィアンの四・九四%であるが、この派は信徒総数が少く、僅か二、七〇〇人であるから、C・O・の数としては少く現れている。なお、良心的にC P S キャンプにすらはいることを拒んだ者や、法廷で良心的拒否と認められなかった者は投獄された。その種の被投獄者が一番多かったのは、エホバの証人たちであった。アメリカの選抜徴兵法では、牧師と神学生は最初から兵役を免除されていたのであるが、エホバの証人たちは万人祭司主義で、我々はみな牧師と同じ資格を持っているから、C P S キャンプに入れられ

るべきではないと書いて、キャンプ行きをこぼんだからである。
カトリックにも一六二人いたことは注目に値する。しかし信徒総数が多いから率は〇・〇〇一%すなわち十万人に一人の割合である。

クリスタデルフィアン (christadelphiaian 「クリスト」と「アデルフィア」(兄弟たち) というギリシャ語をくっつけた語であり、プレスレンは英語の「兄弟たち」である。

エホバの証人 Jehovah's Witnesses は日本では「もの見の塔」と言っている。和歌山県海南市のこの派の信者で戦争に協力することを拒んだため数年間投獄された七十何才かの一老人に私は戦後会って獄中体験談を聞いた事がある。

エホバの証人にしても、ブレズレンにしても、フレンドにしても、メノナイトにしても、無教会主義におけるように、万人祭司主義で任命された牧師職がなくこれらの派から最も多く C・O・が出たということは注目に値する。

ニーバーと賀川の脱落

防御のための戦争すらしめないという絶対平和主義の思想を続けることは困難なことである。アメリカ FOR の理事長を一九三一年、三二年とつとめたラインホルド・ニーバーは、ヒトラーの人道無視の戦争のため、この思想に疑いを抱きパシフィズム (平和主義) の思想をすて FOR から脱退してしまった。そして今では盛んに C・O・を攻撃している。日本の賀川豊彦は友和会員になったことはないが「国際戦争反対インターナショナル」に加盟しており、また友和会員とも交際していた。彼は平和の聖徒 (パシフィスト・セイント) として欧米にまで名高かったが、戦争中、憲兵隊で暴力的迫害を受けて出て来てからは、「平和主義を太平洋の中に投げすてる」と宣言し、「行け特攻隊」などの詩を作って盛んに戦争をあふった。終戦のあくる日 (八月十六日) の朝日新聞には「戦意昂揚音楽礼拝、於銀座教会、奨励、賀川豊彦」という広告が出たのは物笑いの種になった。日露戦争の時良心的兵役拒否をして投獄された「矢部喜好の生涯」(田村貞一著、本年キリスト新聞社発行) の昭和十二年の旧版には、賀川豊彦の C・O・礼讃の序文がのっている。我らは常に自分の弱さを思って最後まで晩節を全うし得るよう祈るべきである。

無教会のインガーオサム氏は C・O・として憲兵隊に入れられ隊内で賀川氏から C・O・の立場をすてるよう勧告されたがそれを拒み看護卒となることを承諾しただけであった。無教会における最初の C・O・である。

旧日本友和会の成立と解散

FOR が英国で始まってまもなく、数名の外国宣教師と日本人信者たちが鎌倉に集まって平和集会を持っていたが、一九二六年になって初めて「日本友和会」という名のもとに結成した。最初の理事長は小崎道雄氏、書記長兼会計として竹中勝男と長老派の宣教師ウォルサー (T. D. Walser) の二氏になった。その結成には、フレンドの宣教師ボウルズ (Gilbert Bowles) も努力した。近江八幡のメルルーヴォーリス (Merrell Voo

ries) の努力も大きかった。彼は帰化して一柳米来留という日本名になった。しかるに敗戦の前年一九四四年、この日本友和会は当局の弾圧によってつぶれてしまった。安藤肇著「深き淵より」の一五六頁には「友和会解散御通知」という長い文章がのっている。その中には「それは全く米英の個人主義的見地に立った思想であって日本国民として全く自覚を失っていたことを反省させられるのであります。・・・その挑戦に対しては我々としては正義を行はんには、戦争以外に道はないのであります。・・・」という文句がある。

宣教師のウォルサーは開戦のあくる日、三田警察署に拘禁され、田園調布のスマイレ幼稚園に收容され、やがて妻子とともに米国に送り返された。交換船がアフリカのある港で日本人とアメリカ人とを交換した。ウォルサー氏はアメリカ船に乗るやいなや、他の友和会員らと平和集会を開いた。船中における彼のスピーチは同船していた新聞記者によってアメリカに打電された。アメリカに上陸すると警察につれて行かれて三日間監禁された。警察ではいろいろのことを聞いたが「日本のためにならないことは語らない」と言い、警官の前で平和論をぶった。こうして三日目の夜釈放された。

欧米では、古くから良心的拒否の歴史があり、多くの人が主のみ名をいなむことなく殺されてきた。日本にはその歴史は浅く、殉教の例は少い。そのために旧日本友和会もこのようにつぶれてしまった。このことについて我々は大いに反省せねばならぬ。しかし我々はイエスの「あなたがたの中、罪なき者がまず彼女に石をなげよ」との声を聞く。我々自身がひどい暴力的迫害の下におかれたなら、どういう態度をとり得たか、はたして殉教し得たか、それはわからぬ。日本には殉教の歴史が少く、その上、古くから武士道の精神が最善のものとされ、日本人の幼な心には戦争に行つて敵を殺すことが名誉であるという思想が植えつけられていたからである。しかし、こんどこそ、世の中がいかに急変して、信仰または絶対平和が暴力的迫害を受けても、少くとも友和会員の全員が殉教の覚悟を持つべきである。その力は自分の中からは湧いてこない。全能の主祈る以外にない。

ウォルサー氏は、広島と長崎に原爆がおとされるや、直ちに大統領トルーマンに抗議の手紙を送って、「私はアメリカ人であることが、人に顔むけできぬほど恥しい」と言った。平和になると、アジア救済公認団体 (Licensed Agencies for Relief in Asia 略して LARA ララ) に入って、日本およびアジア各地に救済物資を送った。ララはアメリカの十三の宗教団体および労働団体関係者百万人によって組織されたもので、ぼう大なる食糧、衣服などが送られた。その恩沢を直接間接に受けた者は未だ忘れられないであろう。日本では再建された日本友和会のミスーローズがこの分配に活躍した。彼女は、皇太子の家庭教師であったヴァイニング夫人が帰米してからは、皇太子に英語を教えた。

二人ともフレンド派である。ララ物資をアメリカで集めたのは前記諸団体であったが、最も力を入れて働いたのはフレンド奉仕団 (American Friends Service Committee)、世界教会奉仕団、カトリック戦時救済奉仕団の三団体であった。フレンド奉仕団は戦時中からの働きによりノーベル平和賞を得た。

ウォルサーは一九四九年六才で平和運動の旅先で天に帰った。未亡人ウォルサー夫人 (いり皿回 1 巴 ser) は友人たちの醸金により、「ウォルサー記念平和基金」を作り、

再建日本友和会の理事長鮎沢巖氏にその金を托して、日本の大学生から平和論文を募集して賞金を与えた。この論文募集は数年間続いた。彼女は一九五三年日本に来て各地を回ってくれた。

再建日本友和会

日本友和会は一九四九年に再建された。その年の I F o R 理事長ネヴィン・セーヤー氏が日本に来て、その前年から用意していた日本人平和主義者たちとともに作ったのである。鮎沢巖氏が理事長となり、関屋正彦氏が書記長となった。鮎沢氏は十一年間スイスにいて I L O (国際労働機構) に Senior Staff Member として勤めたのち、I L O の東京支局長、そして一九四六年から四九年まで中労委の事務局長となり、以後 ICU (国際キリスト教大学) の教授として一九六六年まで労働法を講じていた。関屋氏は長く日本聖公会の牧師をつとめていたが、終戦後フレンドにはいり、日本友和会のために努めた。一九五〇年政池は関屋氏の勧告でその会員になった。そのころ「日本キリスト者平和の会」ができ、政池も発起人の中に加わったが、綱領の中に「すべての戦争に反対する」という句を入れようという政池の主張は入れられず、「ある場合には戦争もやむを得ぬ」という主張が通ったので、政池は発起人から身を引いていたのである。そのうちにたのまれ理事の中に入った。野々宮初枝夫人は十四年間日本女子大の英語の教授であったが、一九五一年ミスーレスターにすすめられて弱体の日本友和会にはいり、理事になってこれを強めた。彼女は日本婦人矯風会の平和部長でもあり、以前から W I L の会員でもある。I F O R の外人たちが来訪した時には彼女は関屋氏を助けて彼らを接待しかつ彼らの案内役として日本中を回り、また一人でも回っている。また、しばしば外国に出かけて平和主義者たちと連らくをとってくださる。

一九五〇年八月「友和」誌第一号が出た。それまで機関誌はなかったのである。関屋書記長は各地をとび歩いて会員をつのった。そのころの「友和」は月刊ではなくして、第三号は一九五一年五月に、第五号は一九五二年一月に出ている。

友和会第一回全国大会は一九五一年九月御殿場の東山荘で持たれた。政池もミスーレスターも「友和」誌の出席者名簿の方には出ていないがその会に出たことが記事および「聖書の日本」には出ている。出席者四十五名。第二回はその次の年西宮市で開かれた。以後毎年持たれている。一九五四年の第四回のは近江八幡で持たれ、政池の提案で、日本友和会から「韓国、朝鮮国民へのメッセージ」を送った。それは日本が三十六年間朝鮮を植民地として朝鮮国民を苦しめたことに対する謝罪が主で、ソウルの宋斗用氏を通じてその印刷物は韓国で配られた。その文の起草は政池によってなされた。

ただし、それより先、一九五二年四月にはパスモア・エルキントン (ミセス・ニトベの甥) 氏夫婦が東京に来て、アメリカが原爆を日本に落したことに対する謝罪講演をなした。その時、彼は謝罪は高い講壇の上からすべきでないと言って、床の上に降りて話した。そのことは我々に好感をもたせたが、顔などよく見えぬから降りたあとですぐ高だんに上り、高い所から話してもらいたいとも思った。一九五四年にはアメリカがビキニ島でした水爆実験のため放射能の灰をあびた日本焼津の福竜丸船員二十三名および日

本国民全体に対する謝罪文がアメリカFORから来て「友和」誌五月号（第二十九号）にのった。その年の十二月にはブライアント夫人がアメリカ人一万二〇〇〇名の謝罪者名簿をもって来日し、衆議院議長および参議院議長にそれを渡した。また焼津に行って福竜丸船員で亡くなった久保山さんの未亡人その他に会って謝罪した。アメリカをうらんでいた被害者の家族たちけそのうらみが解けたと言った。

他の平和団体との協力

日本友和会は一応クリスチャンだけの平和団体ということになっている。しかし仏教徒などで協力したいと申出る人には、会員ではなくして会友として加わってもらっている。

「会員」と「会友」とは名称がちがうだけで待遇は会員と全く同じである。「クリスチャンとは何ぞや」ということの問題であるが、みずから「私はクリスチャンだ」と言う人は、教義のいかんにかかわらず会員になれることになっている。カトリックでは法王が絶対平和主義ではないが、それでも、絶対平和主義の日本友和会にはいりたいという人が昨年（一九六六年）のことだが数名現われた。理事会でかなり長い討論の末、カトリック信者も入れることになった。欧米では最初からカトリック信者も会員になっている。また、日本友和会は、他の平和団体とも協力している。「キ平協」（キリスト教平和運動協議会）というのは友和会、キリスト者平和の会、キリスト教世界平和同盟その他が加盟して作っているものである。また「宗平協」（宗教者平和運動協議会）とって仏教各派、神道、キリスト教の加わったものもある。「全日本キリスト者平和会議」というのは二回ばかりあったが、それは継続的な会ではない。しかし本年の秋には世界各国から人々を招いて「アジア平和セミ」を開く。友和会からも市東、野々宮、中川、大浜、政池等の委員が出る。「ベトキン」（ベトナムに平和を求むるキリスト者緊急会議）には政池を副議長として友和会から出しているが、市東礼次郎氏、中川晶輝氏も委員として入っている。議長は今鈴木正久牧師である。この会は一昨年（一九六五年）アメリカに五人の特使を送って諸教会にベトナム戦をやめるように勧告した。五人の中二人、西村関一氏と野々宮初枝氏は友和会員である。この会の募金には三百三十二万円の応募があった。日本のクリスチャンが一致してこれだけの金を出したのは初めてである。

日本のクリスチャンの多くは今までアメリカに行った時にはアメリカ人から金を出してもらっていたが、この時は自分のポケットからすべての費用を出して気持がよかった、と特使らは帰ってきて言っていた。その後この会は解散したわけではないが、特別に大したことはしていない。ベトナムの反戦的仏僧チクーナトハン氏が来た時滞在費はこの会から出した。

政池の謝罪渡韓

一九六四年九月七日から二十七日までの三週間、政池は友和会を代表して韓国に謝罪旅行に行ってきた。日韓だけの国交を恢復すれば、韓国政府が強くなり、朝鮮南北の和解が不可能になるという理由で、私の韓国行に反対する者が友和会内にもあった。しかし友和会

は人道を重んずべきであり、かつ、怒り、うらんでいる朝鮮半島の人民の半分にでも、せめて謝罪したい、また韓国人と交わることによって絶対平和主義の思想も伝えたい、また時を得れば、南北のリコンシリエーションにも役立ちたい、というのが政池および大多数の理事の意見であった。そのため友和会員でも旅費のための醸金を拒む者もあった。そうでなくても二〇〇名に満たぬ会員からの醸金では足りないことはわかっていたので、「聖書の日本」読者の中で作っている「エレミヤ会」が必要費用の大半を集めてくれた。その年の六、七月ごろは、韓国内でも、韓日国交回復反対の声が強く、毎日、学生たちの反対デモが韓国政府の警官と衝突し、軍隊まで出て鎮圧し、ついに大学は長期休校ひき続いて夏休みとなってしまった。ソウルにある日本商社の看板が学生たちに引降ろされ、ふみにじられているテレビを見て、私の家族や友人たちは心配していた。しかしこれほど反日気勢が強いからこそ謝罪に行く必要があると私は思った。その前年朴氏が大統領になった時、祝のために日本から行った大野伴睦氏が「日本と韓国との関係は父子の関係だ」と言ったことに韓国人は憤激して大野氏の泊ったホテルは反日デモ隊にとりまかれた。大野氏は「父子の関係」は親しい間がらというつもりであったが、朝鮮では父子の関係は主従の関係と同じくらいに格差のあるものである。日本人でも、たとえばアメリカ大が来て「米日の関係は父と子との関係だ」と言えば気持ちはよくないであろうが、父がそれほど威張っている国ではないので憤激するほどのことはあるまい。ともかく。大野氏はこっそり飛行場まで逃げて行って、ほうほうのていで日本に帰ったのであった。そればかりでなく、日本の外務省の久保田貫一郎氏が、一九五三年に、日本は朝鮮に鉄道を敷いたり、橋をかけたり、木を植えてやったのだから、謝罪する必要もなく、賠償金など出す必要はないと言った、いわゆる久保田発言のために韓国における日本人の人気は最もわるかった。私の友人で内村鑑三先生の弟子であった咸錫憲（ハムーソクホン）氏は韓日会談反対の急先鋒であり、氏の講演会は超満員で氏が「先祖の三十六年間に流した血を僅か三〇〇億ドルで売ることか」と叫ぶと、堂もわれんばかりの拍手だった、とのことであった。私としては賠償金をふやすことは必要だと思っていたが、そうしたことは私の力ではできない。しかし日本国民の一部にでも罪を悔いている者のあることを知ってもらう必要があると思ったので、背後における多くの反対を押切って渡韓した。ソウルの無教会信者・宋斗用（ソングードウヨン）氏、慮平久（ローピュングク）氏はもちろん、咸錫憲氏も温く迎えて下さり、韓国、各地各階層の大に紹介し、いくつかの歓迎会や講演会を開いて下さった。実は日本人で謝罪に渡韓しかのは私より一年先に尾山令仁牧師があったけれども、尾山氏は主として教会方面を回り、私は一般人士に呼びかけた。宋斗用氏が案内して下さいだったので、韓国の主要都市をめぐり歩くことができた。デモさわぎは一応おさまったあとではあり、個人的に敵意を示す人など一人もなかったのみならず、私が謝罪し、かつ、日本の官憲がどんな迫害をしたかを質問したので、日本人でも、そんなに考えてくれる人があるのかと驚いて喜んでくれた。いかにひどい迫害があったかなどは私の旅行記「むくげの国韓国をたずねて」に書いた。また「友和」誌にのせた私の報告文は渡辺義雄氏が訳して英国の *Reconciliation Quarterly* に出した。なお日本友和会理事・関秀世氏が「友和」誌一五七号に書いた「平和を作り出す人たちは幸である」は英国の *Reconciliation Quarterly* 133号に英

訳してのせられた。

韓国に行くために私の用意して行った金が少し余ったので、その次の年一九六五年には宋斗用氏に日本に来てもらい、日本友和会で晩餐会と講演会をもった。宋氏は、日本が謝罪する、韓国がゆるす、というようなものではなく、韓国が一旦日本にとられるようになったのは韓国人がわにも責任があったのだから、お互いに主イエスキリストにあって一つとなろう、と言って下さった。それを聞いていた宋氏の親戚にあたる在日韓国人は、聴衆の中には韓国のスパイがいてあなたの話は本国につつぬけになるのだから、もっと慎重に話せ、と注意したくらいである。しかし宋氏はその後日本全国各地を私と共に歩いて、同じようなことを言って回って下さった。宋氏の滞在費ならびに帰りの費用は、再びエレミヤ会と「聖書の日本」読者のご厄介になった。友和会には金がないからである。私が韓国の牧師諸氏と会談した時ある人から「あなたのような無教会の個人ではなく、日本キリスト教団の代表から謝罪に来てもらいたい」との希望があったので、一九六六年教団の議長大村勇氏が、別の用件で渡韓した時そのことを話しておいた。韓国の教会では、大村氏をソウルに入れるべからず、という者が多く、大村氏がソウルの飛行場に着いても、まだ態度が決定せず、氏はそこで一時間ばかり待たねばならなかった。しかし、最後に決をとったら一票の差で迎えようということになった。集会場の高だんに立った大村氏は開口一番に謝罪をされたので、以後は大歓迎の中に終わったとのことである。

書記長の交代と理事長の離日

一九六五年一月、書記長関屋正彦氏がニュージーランドのマッセイ大学に招へいされて講師となって行ったので、そのあとを新美芳郎氏がうけて八ヶ月間書記長になった。しかし新美氏はIFORの委員になるためと、アメリカ生れの夫人（二世）のため、かつ子供らにアメリカの教育を授けるために日本を離れた。そこで市東礼次郎氏が書記長になって今日におよんでいる。理事長鮎沢巖氏は数年前軽い脳出血があり、だいぶよくなりましたが、一九六六年秋、令息、令嬢たちが国際結婚して住んでおられるスイスで晩年を送るべく離日されたので、理事長の席は今は空白である。

ここ二、三年の友和会

一九六五年秋アフリカーガーナのエンクルマ大学教授アイゲン氏を日本友和会は迎えた。氏は織物の研究のため桐生の群馬大学工学部で書上誠之助教授の指導を数年間受けて来、その年のクリスマスごろ帰国することになっていたので書上教授の紹介で迎えたわけである。政池宅に来てもらい数名と夕食を共にしたのち、アイゲン氏持参のガーナの映画を見つつ説明を聞いた。アイゲン氏は有色人種の日本人の家庭で歓迎されたことをひじょうに喜んで下さった。この時、私はアジア、アフリカの友和に関する日本友和会の使命の大きいことを感じた。

なお、この日にはICU（国際キリスト教大学）で半年ばかり講義していて近く帰米するはずだったFOR会員J・D・デヴィス氏も政池宅のアイゲン氏歓迎会に来て、激烈な（ア

メリカ当局から見れば)、ベトナム戦即時中止、アメリカ兵引上げ論をのべた。彼の書いた小文「聖戦と悪魔との対話」は「聖書の日本」一九六六年三月号(三五七号)

に政池節子が訳してのせた。その抄は「友和」誌第二八七号にも出た。

一九六五年の暮には、日本友和会でAn Appeal to American Citizens on Vietnam Warという一文を英文で印刷してアメリカFORにたくさん送った。草案を政池が作り、市東書記長が英訳したものを理事会で推敲添削したものである。これはそのままアメリカFORでクリスチャンセンチュリーに投稿してくれ同誌一九六六年の一月号にのった。それを読んだアメリカ婦人は感謝してJFOR(日本友和会)に寄付金を送ってきた。原文は同年同月の「友和」誌(一五八号)に「ベトナム停戦の訴え」と題して出ている。

一九六六年四月にはアメリカ人でFORの理事長もしたことのあるA・J・マステ(A. J. M u s t e)氏がベトナムに行く途中日本に立ちよった。彼はその時八十一才であったが、若いアメリカ人男女数名がついていた。日本友和会は鮎沢理事長宅で彼らを迎え、祈りと激励の言葉をもって送り出した。彼らの行く目的は、戦争でいかにベトナム人民が困っているかを見て帰り、それをアメリカ人に訴えるということであった。しかるに彼はサイゴンの飛行場ですぐ逮捕軟禁されたと新聞に出た。心配していたら一週間ばかりして突然、東京に来てさらにアメリカに帰って行った。しかし若い随員たちは自由にベトナム人たちと話したりかの地の様子を見たりして、その中の一人の女性はしばらくののち東京に来、市東書記長宅を訪問後帰って行った。市東書記長の狭いアパートにはその他しばしば外国人が来て泊ったり夕食をいただいたりして帰ってゆく。そうした費用も今の所市東氏個人が出し友和会の会計からは出ない。マステ氏は本年一九六七年二月に天に帰った。

韓日友和の会

日本友和会員でアメリカのメノナイト宣教師であるカールベック氏は「友和」誌の初めてのころの号には盛んに平和論文をのせて下さっていたが、近年諸地方で平和セミナーを開いて下さる。一九六五年には東京八王子で日韓問題平和セミナーを開いて下さり、韓国にもしばしば行って平和セミナーを開いて下さった。そして一九六六年五月にはメノナイト派から五〇万円を出して韓国人八名を招待し八王子で二泊三日の「韓日平和セミナー」を催して下さった。団長の大邱大学校教授・張基東(チャンキドン)氏の東京渋谷での講演は、聴衆一同に大なる感銘を与え悔改めと愛韓心と平和心を起させた。講演後聴衆は前に出て行って八名の韓国人たちと、それぞれ、かたい握手をした。その様子は市東書記長からIFORに報告され、「リコンシリエーションクォーター」に載った。

この事件を契機として、張氏らの来る少し前に「韓国キリスト者友和の会」というものが生まれた。ベック、尾山令仁牧師、市東礼次郎、高橋三郎、堤道雄、前田正之、呉允台牧師、李仁夏牧師、政池仁などが加わり、政池が代表ということになった。これは必ずしも日本友和会員のみでなく、真に韓民族と日本民族との友和をはかろうと願う者の会である。

第一回はこうしてアメリカ人の費用で開かれたのであるが、第二回からは日本人自身の金で開こうということになり、五〇万円の金を募集し、一九六七年（本年）五月御殿場の東山荘で昨年と同様の集会をもった。韓国からの客人は十名で、総員五十数名集った。韓国側の慶北大学校教授・盧明植（ロ・ミュンシク）氏の「日本の繁栄の半分は韓国軍隊が北からの共産主義侵略を防いでいるからである」という意見に対しては日本側の絶対非戦主義の立場の人々から、かなり多くの反論があったが、お互いに冷静かつ紳士的に、また腹ぞうなく意見の交換ができた。日本側で最も強く反論した四国新居浜の橘新氏と盧明植氏とは最後の昼餐会で隣同志に座って語り合い、橘氏のネクタイピンと、盧明植氏のベッコウにいた靴べらとが交換され、和気あいあいの中に解散された。しかし韓国人十名の考えが皆右の通りではなく、無教会信者「聖書研究」主筆・盧平久（ローピュングークー）氏はたと国が亡びても無軍備非戦の立場を守るべきがクリスチャンの主から命じられている処だとのべた。なお同氏は「聖書研究」誌上で韓国のベトナム出兵反対論を発表している。その他、呉允台氏の「在日韓国人の実態」、市村彰氏の「密入国者の問題」、藤尾正人氏の「在日韓・朝鮮人の教育問題」などが報告された。これらの貴重な資料は近いうちに、まとめられて一本になるであろう。

なおそれより前に一九六六年の暮から正月にかけてFORの藤沢武義氏が、また同じくFORの藤尾正人氏が、それぞれ友和会ではあるが、会の費用でなしに渡韓して謝罪友愛につとめた。

C・O・研究会

一九六五年から六年、七年前半にかけて、理事高田哲夫氏を中心に、日本友和会の数名が毎月一回集まって、世界各国のC・O・の歴史法律などを研究発表し、そのつどパンフレットを発行して来た。それらは近いうちにまとめられて新教出版社から「兵役拒否研究ノート」という本となって出るはずである。

以上の文章は政池がその狭い見聞をもととして書いたもので、実は鮎沢巖、関屋正彦、野々宮初枝、高良富、関秀世、西村関一氏ら諸氏の活動がほとんど記されていない。甚だかたよった不完全な日本友和会の紹介にすぎないが、より完全なものを誰かが早く書いてくれることを待つ。

参考書

V e r a B r i t t l a n : T h e R e b e l P a s s i o n (A S h o r t H i s t o r y o f S o m e P i o n e e r P e a c e m a k e r s . N e w Y o r k)

L i l i a n S t e a v e n s o n : T o w a r d s A C h r i s t i a n I n t e r n a t i o n a l

(T h e S t o r y o f t h e I n t e r n a t i o n a l F e l l o w s h i p o f R e c o n c i l i a t i o n , N e w Y o r k)

40 Years for Peace (A History of F.O.R. 1914-1954), N.Y.